

ANNOUNCEMENTS

I. The 39th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics, 1994

The 39th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics was held on October 18–20, 1994 at the International Conference Hall, Nippon Convention Center (Makuhari Messe), Makuhari, Chiba. Professor Yasuo Nakagome, Department of Human Genetics, School of International Health, University of Tokyo, acted as president at the Annual Meeting. A total of 584 members participated in the meeting.

The academic program consisted of 5 plenary lectures, one symposium, and 215 oral presentations by active members.

Professor Ichiro Matsuda, Department of Pediatrics, Kumamoto University, School of Medicine, who was the winner of the Japan Society of Human Genetics Award for 1994, gave the memorial lecture entitled “Molecular aspects of inherited metabolic disorders of amino-acids.” Dr. Shigeo Nagafuchi, Department of Congenital Abnormalities Research, National Children’s Medical Research Center, who was the winner of the 1994 Award for encouragement of younger human geneticists, gave the memorial lecture entitled “Molecular analyses of DRPLA and azoospermia.”

Dr. Shigekazu Nagata, Osaka Bioscience Institute, gave the special lecture, entitled “Apoptosis—including genes and their mutations.” The following 2 special lectures for education were given: 1) “Genetic counseling, genetic services and medical genetic education in the United States” by Dr. S. Robert Young, Department of Ob/Gyn, Div. Med. Genetics, University of South Carolina, USA; 2) “Recent advances in molecular genetics of non-insulin dependent diabetes mellitus” by Dr. Takashi Kadowaki, 3rd Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, University of Tokyo, with additional comments of “Aldose reductase and diabetic complications” by Dr. Chihiro Nishimura, Department of Pediatric Pharmacology, National Children’s Medical Research Center.

The symposium, entitled “Molecular aspects on dominantly inherited diseases,” was chaired by Dr. Ichiro Kanazawa, Department of Neurology, Institute for Brain Research, University of Tokyo, in which 5 papers were presented and discussed.

Abstracts of the symposium, 5 lectures and 215 oral presentations will be printed in this issue (Vol. 40, No. 1, 1995) of the Journal.

The Meeting of the board of Directors of the Japan Society of Human Genetics was held on October 17 at the International Conference Hall in Makuhari Messe, Chiba. The main agenda of the meeting consisted of the following: 1) Recommendation of honorary members of the Japan Society of Human Genetics; 2) The budget of the Society for fiscal year 1995; 3) Nomination of the president of the 41st Annual Meeting of the Society; 4) Alternation of the Editor-in-Chief; 5) Alternation of the chairman of the Committee for qualification system for specialist in medical genetics; 6) Alternation of the chairman of the Executive committee for medical genetics seminar; 7) Collection of the supporting members of the Society. Reports were prepared on the following subjects: 1) Numerical changes in the society membership; 2) Financial report and audit; 3) Arrangements for the 39th and 40th Annual Meetings; 4) Status of submission and acceptance of manuscripts for the Japanese Journal of Human Genetics; 5) Reports from the following committees;

Selection committee of the society awards, Committee for human genetics teaching, Committee for qualification system for specialists in medical genetics, Committee for qualification system for specialists in clinical cytogenetics, Committee for genetic counseling and prenatal diagnosis, and Committee for social insurance; 6) Reports on the National Committee of Medical Genetics and the National Committee of Genetics of the Japan Science Council; 7) Reports on the Council of the Japanese association of medical sciences; 8) Reports on the 4th Medical Genetics Seminar (Sept. 16-18, 1994, Nagoya); 9) Reports on the 1st Clinical Cytogenetics Seminar (Aug. 27-28, 1994, Isawa, Yamanashi).

Subsequently, the Council of the Japan Society of Human Genetics was held at the same place to discuss the agenda proposed by the Board of Directors.

The general assembly of the Japan Society of Human Genetics was called on October 19th at the International Conference Hall. The subjects drafted by the Board of Directors and approved by the Council of the Society were passed in their original forms at the conference. Professor Kiyotaro Kondo, Department of Public Health, Hokkaido University, School of Medicine, was nominated to preside at the 41st Annual Meeting which will be held in Sapporo in the fall of 1996.

The agenda and reports presented at the Conference are described below in more detail (in Japanese).

II. 日本人類遺伝学会第39回(1994)大会記事

会場：千葉市美浜区中瀬2-1 幕張メッセ内・国際会議場ビル

会期：平成6(1994)年10月18日(火)~10月20日(木)

大会会長：中込弥男教授(東京大学大学院医学系研究科・人類遺伝学講座)

発表：特別講演：アポトーシスとその異常. 長田重一(大阪バイオサイエンス研究所)

座長：中込弥男(東大・人類遺伝)

教育講演

1. Genetic counseling, genetic services and medical genetic education in the United States. S. Robert Young 博士 (Div. Med. Genet., Univ. South Carolina)

座長：松田一郎(熊本大・小児科)

2. 糖尿病の成因をめぐる分子生物学. 門脇 孝(東大・第三内科)

座長：和田義郎(名市大・小児科)

特別発言：アルドース還元酵素と糖尿病合併症. 西村千尋(小児医療研究センター)

受賞記念講演

1. 先天性アミノ酸代謝異常症の分子遺伝学的研究. 松田一郎(熊本大・小児科)

2. DRPLA および無精子症の分子遺伝学的研究. 永瀨成夫(小児医療研究センター)

座長：三輪史朗(沖中研)

シンポジウム：優性遺伝病とは何か. 発症の分子機構を中心に.

司会：金澤一郎(東大・精神内科)

一般演題 215 題

第1日(10月18日)

中込大会会長による開会の辞に引き続き, 午前中は3会場で一般演題の発表があった. 昼休みには

編集委員会が開かれ、午後是一般演題の発表と共に特別講演があった。また一般演題と並行して遺伝医学セミナー実行委員会が開かれた。夜は臨床細胞遺伝学認定士制度委員会と *Dysmorphology Conference* が開かれた。

第2日 (10月19日)

午前是一般演題の発表があった。昼休みに臨床遺伝学認定医制度委員会が開かれた。午後は総会議事、学会奨励賞と学会賞の授賞式が行われ、長瀨成夫氏による学会奨励賞受賞講演、松田一郎氏による学会賞受賞講演があった。直後恒例の写真撮影、次いで教育講演Ⅰが行われた。夜は国際会議場内3階301号室にて恒例の懇親会が盛大に催された。

第3日 (10月20日)

午前中、3会場にて一般講演があり、昼食時に臨床細胞遺伝学セミナー実行委員会が開かれた。午後は教育講演Ⅱと特別発言があり、これと並行して臨床遺伝学認定医制度試験が行われた。午後の後半はシンポジウムが夕刻まで行われ、最後に中込大会会長の閉会の辞をもって全日程を終了した。

大会への会員参加は、3日間を通して406名(名誉会員4名、評議員41名、一般会員361名)、および会員外の当日参加者178名(うち招待講演者4名、シンポジスト1名)、合計584名であった。広汎な研究領域で活発な討論が行われた。

理事会 (本年度第2回)

日時: 1994(平成6)年10月17日(月) 14:30~16:30

場所: 幕張メッセ内・国際会議場ビル(千葉市美浜区中瀬2-1)

出席者: 三輪理事長、梶井(認定医制度委員会委員長)、中込(編集委員長)、松田(次期大会会長)、
 笹月・多田・新川各理事、岡嶋・今村両監事、近藤(喜)(教育推進委員会委員長)、古山(臨床細胞遺伝学認定士制度委員会委員長)、安河内(会計)・黒木(編集)・池内(庶務)各幹事

報告事項

1. 名誉会員の計報(三輪)
2. 庶務報告(会員移動状況)(池内)
3. 平成5(1993)年度会計報告および平成6(1994)年度中間報告(安河内)
4. 平成5(1993)年度会計監査報告(岡嶋, 今村)
5. 第39回(1994年度)大会準備状況(中込)
6. 第40回(1995年度)大会準備状況(松田)
7. 委員会報告
 - 1) 編集委員会(中込), 2) 教育推進委員会(近藤), 3) 臨床遺伝学認定医制度委員会(梶井),
 - 4) 臨床細胞遺伝学認定士制度委員会(古山), 5) 遺伝相談・出生前診断に関する委員会(松田), 6) 社会保険小委員会(黒木)
8. 日本学術会議(三輪)
9. 日本医学会評議員会(笹月)
10. 第4回遺伝医学セミナーの報告(新川)
11. 第1回臨床細胞遺伝学セミナーの報告(池内)

協議事項

1. 名誉会員の推薦(三輪)
2. 第41回(1996年度)大会会長並びに開催地(三輪)
3. 1995(平成7)年度予算案(安河内)

4. 編集委員長の交替について（三輪）
5. 認定医制度委員会委員長（認定医制度協議会委員）の交替について（三輪）
6. 遺伝医学セミナー実行委員会委員長の交替について（三輪）
7. 準会員制度の提案（臨床細胞遺伝学認定士に関連して）（梶井）
8. 維持会員の募集について（三輪）
9. 会員数増加に伴う学会誌発行部数の増刷と本年度学会誌の配布について（中込，安河内）
10. 恒久制度による認定医の試験について（梶井）
11. 1995(平成7)年度選挙管理委員会の設置（三輪）
12. 第41回(1996年度)大会会長挨拶（近藤）

評議員会

日 時：1994(平成6)年10月17日（月）

場 所：幕張メッセ内・国際会議場ビル（千葉市美浜区中瀬2-1）

出席者：41名

I. 報告事項

1. 中込大会長より，第39回大会の開催と準備状況について報告があった。
2. 三輪委員長より，名誉会員の Dr. Jérôme Lejeune（フランス）(67歳)が1994年4月3日（本誌39巻4号，455頁，1994）に，鈴木安恒先生（元慶応義塾大学医学部教授）(86歳)が同年4月11日に（本誌39巻2号，289頁，1994，参照），また操 垣道先生（九州大学名誉教授）(102歳)が同年9月11日に御逝去された旨の報告があった。
3. 庶務報告：最近1年間の会員移動状況（資料1）が報告され，とくに本年度1月から9月までにすでに228名の会員数の増加があった旨紹介された。また学会入会申込書の案内文が一部改訂された旨の報告があった。
4. 会計報告：1993(平成5)年度会計報告（資料2）および1994(平成6)年度会計中間報告（資料3）があった。引き続き1993年度会計報告の監査報告がなされ承認された。
5. 委員会報告
 - 1) 編集委員会：中込委員長より，本誌の発行状況，論文の投稿および受理状況が報告された。
 - 2) 学会賞選考委員会：1994年3月28日に開催された委員会の審議結果について報告された（本誌39巻2号，289頁，1994，参照）。
 - 3) 教育推進委員会：ヒトの遺伝学をもち込んだ卒前医学教育への充実化を目的とした本委員会の活動状況が近藤委員長より報告された。全国の大学で進行中の「大学大綱化」に伴う人類遺伝学教育の導入状況を知るためのアンケート調査は各大学における情勢の相異によりこれを施行することが困難であること，医師国家試験委員会に人類遺伝学関連の委員を加えたいとする厚生省への要望は実現しなかったが，過去数年間の出題問題のうち遺伝学関連の不適切問題の調査が本学会に依頼され，現在調査中であること等の報告があった。
 - 4) 臨床遺伝学認定医制度委員会：梶井委員長より，平成5年度収支決算，経過措置によるこれまでの認定医数（313名），恒久制度による研修医の状況，恒久制度による第1回試験（1994年10月20日）の準備状況等が報告された。
 - 5) 臨床細胞遺伝学認定士制度委員会：古山委員長より，第1回の認定（経過措置による）申請状況と指導士，研修施設の認定委嘱の見込み数等が報告された。
 - 6) 遺伝相談・出生前診断に関する委員会：松田委員長より標記委員会で起草されたガイドライン（会告）(案)について，日本産科婦人科学会と日本小児科学会との対応経過が紹介され，

さらに検討を続ける旨の報告があった。

- 7) 社会保険小委員会：黒木委員長より、遺伝相談の保険点数化を日本小児科学会と共同で厚生省に申請したが実現しなかったことを踏まえ、さらに内保連などに理解を求めるための働きかけが必要であるとの報告があった。
6. 日本学術会議：第16期日本学術会議第7部会員として本学会推薦の三輪理事長が任命されたことが報告された。また、第16期の遺伝医学研連委員には、三輪会員のほか、日本先天代謝異常学会から推薦のあった多田啓也、北川照男の2氏に加えて、榎佳之、梶井正、佐藤孝道、新川詔夫、中込弥男の計8名が委嘱された旨の報告があった。遺伝学研連委員候補者として、本学会からは外村晶氏が推薦された旨の報告があった。
7. 日本医学会評議員会：笹月理事より、第61回定例評議員会（1994年2月22日）での議事と日本医学会役員選挙結果について報告があった（本誌39巻3号、363頁、1994、参照）。
8. 1995(平成7)年度大会準備状況報告：第40回大会は、1995(平成7)年9月20日(水)～22日(金)に、熊本市市民会館で開催予定である旨、松田次期大会会長（熊本大学医学部小児科）より報告があった。
9. 第4回遺伝医学セミナー：新川理事（本セミナー実行委員会委員長）より1994年9月16日(金)～18日(日)の3日間、名古屋市で開かれ、255名の参加者を得て盛会であったことが報告された。
10. 第1回臨床細胞遺伝学セミナー：池内庶務幹事（本セミナー実行委員会委員長）より、1994年8月27日(土)～28日(日)の2日間、山梨県石和町で開催され、当初の予定定員を超える135名の参加者があって盛会であった旨、報告された。

II. 協議事項

1. 理事長より、木村資生博士（国立遺伝学研究所名誉教授）および柳瀬敏幸博士（九州大学名誉教授）を名誉会員に、また Dr. John, M. Opitz (Shodair Children's Hospital, Helena, Montana, USA) を海外名誉会員に推挙することの提案があり、諒承された。
2. 理事長より、第41回大会（1996年度）は近藤喜代太郎教授（北海道大学医学部公衆衛生学教室）にお願いしたい旨の提案があり、諒承された。
3. 1995(平成7)年度学会予算案（資料4）が協議され、原案どおり諒承された。
4. 中込・現編集委員長の一身上の都合により、次年度より新編集委員長として笹月理事に委嘱したい旨の提案があり、諒承された。
5. 臨床遺伝学認定医制度委員会の梶井・現委員長から、次年度より委員長を新川理事に交替したい旨の申し出があり、諒承された。
6. 臨床遺伝学認定医制度委員会委員長（認定医制度協議会委員）が梶井理事から新川理事に交替したことに伴い、新川理事より、遺伝医学セミナー実行委員会の委員長を福嶋義光評議員に交替させたい旨の申し出があり、諒承された。
7. 維持会員の募集について、浜口前理事により起草された趣意書の様式検討と印刷が安河内会計幹事に一任され、当会員募集についての具体的な方策が検討された。
8. 前回理事会より継続審議となっていた準会員制度の設置案について、第1回臨床細胞遺伝学セミナーで受講者を対象に行われたアンケート調査結果が池内庶務幹事（セミナー実行委員長）より紹介され、また本件に関する他学会の現況も検討され、協議のうえ、本件は近い将来に向けた検討課題となった。
9. 学会会員数が急増したことに伴い、今年度の学会誌39巻1号、2号が増刷されたことが中込

編集委員長と安河内幹事から報告され、それでもなお不足する場合の対応策について協議された。

10. 恒久制度による認定医の第1回認定試験は、受験者8名を対象に大会第3日目(10月20日)に面接試験として行いたい旨、梶井認定医制度委員長より申し出があり、諒承された。
11. 来年度は役員選挙の年に当たるため、選挙管理委員会を設置し、委員長に黒木幹事、委員に今村監事と安河内・池内両幹事に委嘱したい旨の提案が理事長からあり、諒承された。
12. 笹月理事より、遺伝子診断に関する諸問題を本学会でも検討する必要がある旨の提案があり、協議のうえ本件については現行の遺伝相談・出生前診断に関する委員会(委員長:松田理事)が検討課題とすることとなった。

総会

日時:1994(平成6)年10月19日(水)

場所:幕張メッセ内・国際会議場ビル(千葉市美浜区中瀬2-1)

I. 報告事項

1. 中込大会長から、第39回大会運営についての状況報告があった。
2. 三輪理事長から、本学会名誉会員の Dr. Jérôme Lejeune、鈴木安恒博士および操 坦道博士の御逝去の報告があった。
3. 庶務報告:過去5年間の会員移動状況、とくに今年度に入ってからからの会員数急増についての報告があった。
4. 会計報告:1993(平成5)年度会計報告と1994(平成6)年度同中間報告があった。
5. 1993(平成5)年度の会計監査報告があり、承認された。
6. 委員会報告:編集委員会、学会賞選考委員会、教育推進委員会、臨床遺伝学認定医制度委員会、臨床細胞遺伝学認定士制度委員会、遺伝相談・出生前診断に関する委員会、および社会保険小委員会について、それぞれの報告があった。
7. 日本学術会議:第16期の第7部会員として本学会推薦の三輪理事長が任命されたこと、また第16期の遺伝医学研連委員の委嘱および遺伝学研連委員の推薦について、三輪理事長より報告があった。
8. 1995(平成7)年度第40回大会の準備状況:松田次期大会会長から報告があった。
9. 第4回遺伝医学セミナー:1994(平成6)年9月16日~18日に名古屋市で開催されたセミナーの状況が新川セミナー実行委員長より報告された。
10. 第1回臨床細胞遺伝学セミナー:1994(平成6)年8月27日~28日に山梨県石和町で開催されたセミナーの状況が、池内セミナー実行委員長より報告された。
11. 日本医学会用語委員会への本学会の参加状況が三輪理事長より報告された。
12. 次回の国際人類遺伝学会は、1996年にブラジルのリオデジャネイロで開催される旨の報告が三輪理事長よりあった。

II. 協議事項

1. 本学会名誉会員に、木村資生博士、柳瀬敏幸博士、および Dr. John M. Opitz を推挙したい旨の提案があり、諒承された。
2. 第41回(1996年度)大会は、近藤喜代太郎教授(北海道大学医学部公衆衛生学教室)を大会会長として札幌市で開催する旨の報告があり、諒承された。
3. 1995(平成7)年度予算案について協議され、原案どおり諒承された。
4. 編集委員長が次年度より中込理事から笹月理事に交替する旨の報告があり、諒承された。

5. 臨床遺伝学認定医制度委員会委員長が次年度より 梶井理事から新川理事に交替する旨の報告があり、諒承された。
6. 遺伝医学セミナー実行委員会委員長が、次年度より新川理事より福嶋評議員に交替する旨の報告があり、諒承された。
7. 維持会員募集のための趣意書作成を含む具体策が報告され、協議のうえ諒承された。
8. 臨床細胞遺伝学認定士制度の発足に伴って提示された本学会の準会員制度の設置案について、その趣旨説明が行われ、近い将来に向けた検討課題となっている旨の報告があり、諒承された。
9. 学会会員数の急増に伴い学会誌 39 巻 1 号と 2 号を増刷したことが紹介され、さらに不足する場合の対応策を協議中である旨の報告があり、諒承された。
10. 恒久制度による認定医の第一回認定試験の準備状況が報告され、諒承された。
11. 現行の遺伝相談・出生前診断に関する委員会では、遺伝子診断に関する諸問題も検討課題とすることになった旨の報告があり、諒承された。
12. 来年度の新役員選挙選出に関わる選挙管理委員会を設け、委員長に黒木幹事、委員に今村監事と安河内・池内両幹事が委嘱されたことが報告され、諒承された。
13. 最後に、第 41 回大会（1996 年度）大会長、近藤喜代太郎教授（北海道大学医学部公衆衛生学教室）より挨拶があった。

（庶務幹事 池内達郎）

[資料 1]

年度別・会員数の推移（過去 5 年間）

		平 1 89・12	平 2 90・12	平 3 91・12	平 4 92・12	平 5 93・12	平 6 94・8・31
国 内 会 員	普通会員	975	990	1,258	1,214	1,347	1,502
	〃（学生）	69	87	0	0	0	0
	名誉会員	18	16	16	15	15	14
	維持会員	4	3	3	3	3	2
	機関会員	84	80	80	79	75	73
	寄贈・交換	9	9	9	9	9	9
	合計	1,163	1,185	1,366	1,320	1,449	1,600
海 外 会 員	普通会員	25	31	35	31	33	34
	名誉会員	8	11	11	11	12	11
	寄贈・交換	11	11	12	11	12	13
	合計	44	53	58	53	57	58
総合計		1,207	1,238	1,424	1,373	1,506	1,658

[資料 2]

平成5年度会計報告 (1/1/93~12/31/93)

収 入		支 出	
前年度繰越金	5,198,921円	雑誌刊行費	5,612,813円
会 費	6,286,740	雑誌発送費	488,158
雑誌売上代	560,050	雑誌編集費	350,000
論文掲載料	1,060,320	大会補助費	500,000
文部省科研費	920,000	I G F 会費	31,127
医師会補助金	200,000	事 務 費	2,386,013
抄録利用料	10,300	会議・旅費	404,205
預 金 利 子	167,622	人 件 費	600,000
認定医審査料	80,000	認定医審査料返還	80,000
		染色体検査認定制度設置 準備委員会 (貸出)	300,000
		次年度繰越金	3,731,637
計	14,483,953円 (実収入 9,285,032円)	計	14,483,953円 (実支出 10,752,316円)

実収入 9,285,032円—実支出 10,752,316円=△1,467,284円

[資料 3]

平成6年度会計中間報告 (1/1/94~10/16/94)

収 入		支 出	
前年度繰越金	3,731,637円	雑誌刊行費	6,332,887円
会 費	9,697,850	雑誌発送費	475,396
雑誌売上代	360,850	雑誌編集費	350,000
論文掲載料	602,560	大会補助費	500,000
抄録利用料	14,420	事 務 費	1,080,748
預 金 利 子	60,430	会議・旅費	364,835
文部省科研費	1,030,000	人 件 費	525,000
染色体検査認定 制度設置準備 委員会 (返済)	300,000		
計	15,797,747円 (実収入 12,066,110円)	計	9,628,866円

[資料 4]

平成7年度予算案

収 入		支 出	
前年度繰越金	2,000千円	雑誌刊行費	7,300千円
会 費	10,070	雑誌発送費	500
雑誌売上代	400	雑誌編集費	350
論文掲載料	700	大会補助費	500
文部省科研費	1,100	I G F 会費	40
医師会助成金	200	事 務 費	2,700
預 金 利 子 他	20	会議・旅費	500
		人 件 費	600
		予 備 費	2,000
計	14,490千円	計	14,490千円

日本人類遺伝学会編集委員会議事録

日時：1994年10月18日(火) 12:00~13:00

場所：幕張メッセ内・国際会議場 202号室

報告事項

1. 編集長の交代：中込(東大)→笹月(九大)。理事会で諒承済み。
交代の時期については両者で具体的につめる。
2. 雑誌の発行状況
順調に推移している。現時点で投稿43編、採択26、不採択9、残りは査読中。39巻3号の刊行の時点では昨年と同様のページ数だが、39巻4号に収録する論文が多いので、ボリュームは昨年をやや上回ると予測される。

協議事項

1. 雑誌の発行コスト上昇の件
会員数の急激な増加に伴う雑誌の増刷でコストが上昇。また会告、認定医、細胞遺伝学認定士関係の記事の増加もその一因。解決策として①学会号の英文抄録を止める、②査読を厳しくして掲載論文数を減らす、③フロッピーディスクでの投稿を勧める、④維持会員を増やす等の意見が出された。しかし、英文抄録は残すこととなった。また、コストの上昇は人類遺伝学会の発展を反映している面もあり、積極的なコスト削減は行わず今後も引き続き検討をすることになった。他方、コスト削減とは逆行するが年4冊を6冊にすることにより、刊行までの期間を短縮せよとする意見もあった。
2. その他
 - 1) 査読期間の短縮により投稿から刊行までの期間をさらに短縮する可能性につき検討した。
 - 2) Genome Data Base との連係の可能性が検討された。
 - 3) 症例報告における写真の掲載許可を文書で得る件が検討され、すぐ投稿規定に盛り込むことにはならなかったが、さらに検討することになった。

(編集幹事 黒木良和)

III. 認定医制度委員会の報告

1. 救済措置による認定医の認定について

臨床遺伝学認定医制度による認定医の申請は過去4回行い、295名に達した。留学・病気療養その他の事情により申請できなかった者を救済するため1994年8月31日に救済措置による募集を行い、11名の応募があった。1994年10月19日に認定委員会を開催し、全員を認定医として承認した。認定期間は1994年10月17日~1998年3月31日までとする。

認定医(応募順、○は指導医)

中井 浩之 ○宇都宮謙二 飯田 忠史 ○岩永 知久 ○西垣 光
松岡瑠美子 ○神保 利春 吉田 雅幸 ○保科 弘毅 緒方 勤
○山内あけみ

なお、従来の認定医中、下記の29名は会員歴(5年以上)または医師歴(10年以上)の規定に達したので、指導医として認定した。

○泉川 良範 ○近藤 達郎 ○中川 均 ○田中 一 ○松浦 伸也
○大橋 博文 ○後藤 雄一 ○野坂 啓介 ○中尾 光善 ○堀田 喜裕

○米田 誠	○柳田 隆	○柳 久子	○上原 茂樹	○金子 清俊
○丹野 芳範	○鷺見 聡	○末廣 正	○濱田 洋実	○野々村安啓
○山内 豊明	○藤森 新	○池上 博司	○大島 章弘	○平山 幹生
○津田 正彦	○宮崎 純一	○三淵 浩	○松浦 稔展	

2. 特別措置による認定について

1991年3月以降に加入した会員中、各専門分野において指導的地位にある下記会員を理事会・委員会の議を得て特別措置による認定医として認定することを承認した。これを受けて下記の会員に申請を促し、申請・審査の上、認定した。認定期間は1994年10月17日～1998年3月31日までとする。

認定医（応募順）

小宮山 淳 早坂 清 高田 五郎 桜川 宣男 金澤 一郎

3. 臨床遺伝学認定医の恒久制度による研修開始

上記の開始届（第四回）は1994年1月1日～11月30日の間に23名を受け付け、研修開始を承認した。研修医の総数は併せて119名に達した。

室谷 浩二	小松 偉子	安藤 紀子	片桐由起子	澤井 知子
松山善次郎	渡辺 光法	関 隆	浅田みどり	坂本 修
中野 基	田村 和朗	浜口 和之	五十嵐久美子	西野 一三
鈴森 伸宏	遠藤 勝英	平吹 知雄	山中美智子	川上 康彦
鷺見 整	中村美保子	三浦 史晴		

4. 恒久制度の試験による認定

恒久制度による認定医の第1回試験は1994年10月20日、幕張における大会最終日の午後に行い、下記の8名が合格した。よって認定医として承認した。認定期間は1994年10月20日から2000年3月31日までとする。

認定医（○は指導医）

倉橋 浩樹 野中 和明 加藤るみ子 田邊 剛 ○久米 晃啓
新井田 要 長谷川奉延 蒔田 芳男

以上で認定医の総数は319名、指導医の総数は248名に達した。

5. 認定医制度委員会の委員長の交替について

1995年1月1日から委員長を梶井 正から新川詔夫に交替し、これに伴って委員会事務局を下記に移転する。

〒852 長崎市坂本1-12-4 長崎大学医学部原研遺伝学部門

TEL: 0958-49-7120 FAX: 0958-49-7121

郵便振替口座: 加入者名「日本人類遺伝学会臨床遺伝学認定医制度委員会事務局」

口座番号 01840-3-43052

なお、委員会の構成は梶井 正、黒木良和、辻 省次、浜口秀夫、日暮 真、福嶋義光、新川詔夫（委員長）の7名である。

6. 研修医（恒久制度による）の届け出について

研修開始・3カ月以内に認定医制度委員会事務局（長崎大・原研遺伝）に届け出てください。

研修開始届は下記の機会に入手できます。

1. 大会受付
2. 臨床遺伝医学セミナー
3. 認定医制度委員会事務局（手紙で請求，返信用封筒を同封）（梶井 正）

IV. 名誉会員の訃報

本学会名誉会員の高原滋夫先生（岡山大学名誉教授）には，1994年11月1日逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

本学会名誉会員の木村資生（国立遺伝学研究所名誉教授，日本学士院会員）には，1994年11月13日逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。（三輪史朗）

V. 9th International Congress of Human Genetics

18-23 August 1996, Rio de Janeiro, Brazil

The Permanent Committee of International Congresses of Human Genetics is pleased to announce that the 9th International Congress will be held in Rio de Janeiro, Brazil on 18-23 August, 1996.

For further information on program, exhibits, committees, etc., please contact the Organizing Committee: Henrique Krieger, Ph.D., Secretary General, 9th International Congress of Human Genetics, Instituto de Ciências Biomédicas, Universidade de São Paulo, Cx. Postal 66208, 05389-970 São Paulo, SP-Brazil, telephone: (55) (11) 818-7328, telefacsimile: (55) (11) 818-7417 or (55) (11) 210-4817, e-mail: 9ichg@biomed. icb2. usp. br.

上記の件に関し，ヴァリグ・ブラジル航空旅客営業部平井康雄氏から第9回国際人類遺伝学会議の予告パンフレットを入手できます。関心のある方は請求してください。予告パンフレットに添付の申し込み用紙で第2報の送付を請求できます。

請求先：〒100 東京都千代田区丸の内 1-1-1 パレスビル内
ヴァリグ・ブラジル航空旅客営業部 平井康雄
(TEL 03-3212-1953~5 FAX 03-3211-6763)

VI. 4th International Genetic Epidemiology Society

20-22 June 1995, Snowbird, Utah

The International Genetic Epidemiology Society is pleased to announce their 4th Annual Meeting which will be held in Snowbird, Utah (June 20-22, 1995). There will be a joint symposium with the Society for Epidemiologic Research, that then meets June 23 and 24, 1995.

For further information on the meeting and membership in the Society, please contact society Secretary-Treasurer, Robert C. Elston, Ph.D., Department of Biometry and Genetics, Louisiana State University Medical Center, 1901 Perdido Street New Orleans, Louisiana, 70112 (USA); telephone: (504) 568-6150; telefacsimile: (504) 568-8500; e-mail: rce@haldne. biogen. lsumc. edu.

VII. 第1回家族性腫瘍研究会学術集会のご案内

会 期：平成7年6月9日（金）

会 場：福島県郡山市 郡山ビューホテルアネックス

〒963 郡山市中町 10-10 TEL：0249-39-1111

プログラム内容：癌の家族内集積および遺伝性腫瘍に関する基礎的・臨床的研究および症例報告

特別講演 1 癌の遺伝外来

特別講演 2 乳癌の遺伝子 BRCA-1

教育講演 癌の家族内集積に関する基礎的遺伝学

演 題 申 込：平成7年3月31日締切

当番世話人：星総合病院外科 野水 整

福島県立医科大学第二外科 土屋敦雄

連 絡 先：星総合病院外科（〒963 郡山市大町 2-1-16）

TEL：0249-23-3711 FAX：0249-39-3141

家族性腫瘍研究会代表：兵庫医科大学第二外科 宇都宮譲二

「ヒト細胞遺伝学命名に関する国際システム」1994年 Memphis 会議
 Memphis Conference on International System for Human Cytogenetic Nomenclature
 (ISCN) 1994

新川 詔夫
 長崎大学医学部原研遺伝学部門

ヒト染色体命名に関する国際会議は1956年にDenverで開催された第1回会議以来、数年置きにLondon, Chicago, Paris, Edinburgh, Lake Placid, Mexico, Stockholmの各地で開かれ、逐次報告書[Denver Conference (1960), London Conference (1963), Chicago Conference (1966), Paris Conference (1971)とその補遺(Supplement, 1975), ISCN(1985), ISCN(1991)]の形で命名法を勧告してきた。今回の会議(Memphis Conference)は1994年10月9日~13日に、7名の常置委員会委員と5名の顧問委員、および3名のオブザーバーの参加のもとに米国Memphis市で開催された。今回の主たる議題は、先の構成的染色体異常の命名[ISCN(1985)]と腫瘍細胞遺伝学の命名[ISCN(1991)]との間の整合性を図ること、および近年の分子細胞遺伝学(FISH)の進歩に対応する命名法の提言の2点である。Memphis会議の結論は報告書[ISCN(1995)]としてKarger社から1995年に出版予定であるが、常置委員会の許可を得て以下に変更点の要点を記す。構造異常に対する表記は基本的にはISCN 1991に従い、一部改訂がある。

- (1) 基本的には先天性(構成的)染色体構成の表記法(ISCN 1985)と後天性染色体構成の表記(ISCN 1991)を統一するが、報告書は正常染色体, 正常変異, 構成的異常, 後天性異常, 染色体断裂, Meiotic chromosomes, In situ hybridizationの各項目に分けて記載してある。
- (2) 従来, 用語"karyotype"は個体・細胞のもつ染色体構成の意味と台紙に添付した染色体の両方を表していたが, 今回から両者を別の用語で表記することになった。"karyotype"は上記の前者に用い, 後者は"karyogram" [和訳は核(型)図?]または"ideogram"とする。
- (3) Non-banded chromosomesの表記法は廃止する。
- (4) "h"は従来命名ではsecondary constrictionの意であったが, heterochromatinの意とする。
- (5) Centromere, "cen", のバンドを10(いちぜろ)とし, 表記に際し必要に応じてこれを2分割し, 短腕に向かう方をp10, 長腕に向かうのをq10とする。これに伴ってp11およびq11は従来のcentromereではなく新たにheterochromatic centromere regionと定義する。
- (6) High-resolution bandingによるideogramをFrancke (1994)のそれに従って更新する。主たる更新点は, 従来の白黒表示では使用困難だったので, 各バンドを5段階の濃度差をつけて表示する。
- (7) 表記シンボルの主な改訂点(右が改訂後)

arrow	範囲	"→", "->"	のいずれでも可
"cs"	染色体	"chr"	染色体
"cl"	染色分体	"cht"	染色分体

"fis"	fission	centric fission
"h"	2次狭窄	constitutive heterochromatin
"Ph1"	Philadelphia染色体	"Ph" Philadelphia染色体

(8) 追加された主な表記シンボル (右が意味)

"add"	由来が不明な付加染色体 (部分)
"~"	不確かな切断点
"<>"	Ploidy level : <3n><4n>など
"[]"	観察・分析細胞数 [6] : 6個の細胞を観察
"c"	構成的核型 constitutional karyotype
"cp"	composite karyotype
"de novo"	de novo異常
"dmin"	double minute染色体
"hsr"	均一染色部位 homogeneously staining region
"idem"	多数のクローンがあるとき、最初に記載する核型と同一の核型を省略する場合に用いる
"idic"	isodicentric chromosome
"ml"	主細胞系(main line)
"×"	複数の同一構造異常
"qdp"	quadruplication
"sct"	2次狭窄
"tel"	テロメア
"tas"	telomeric association
"trc"	tricentric
"trp"	triplication
"unv"	1価染色体
"upd"	片親性ダイソミー

(9) "+" や "-" シンボルは、染色体全体の増減にのみ使用する。染色体の各腕の長さの増減には使用しない。したがって、従来の5p-や16q+はkaryotypeの表記としては不可。

(10) 染色体記載の順番は、最初に染色体総数、次に性染色体構成、次に(数的・構造異常に拘わらず)常染色体番号順に記載する。ある染色体に数的異常と構造異常の両方が存在するときは、数的異常を先に記載。構造異常はシンボルのアルファベット順に記載。

例 : 49,X,t(X;18)(p11;q11),+3,inv(3)(q21q28),+7,+10,-20,del(20)(q11),+21

(11) なるべく"+"や "-" シンボルを避ける (右が改訂後)

例 : 46,XX,-5,+der(5)t(2;5)(q21;q31)mat 46,XX,der(5)t(2;5)(q21;q31)mat
 47,XX,-2,+der(2),+der(5)t(2;5)(q21;q31)mat 47,XX,der(2),der(5)t(2;5)(q21;q31)mat

- (12) Centric fission
例 : 47,XY,fis(10)(p10),fis(10)(q10)
- (13) 脆弱部位
例 : 45, fra(X)(q27.3)
46,X, fra(X)(q27.3)
46,Y, fra(X)(q27.3)
47,XY, fra(X)(q27.3)
- (14) イソ染色体 (右が対応する detailed system)
例 : 46,X,i(Xq10) Xqter→cen→Xqter
46,XX,idic(17)(p11) 17qter→cen→17p11::17p11→cen→17qter
- (15) 環状染色体 (右が意味)
例 : 53,XY,.....,+r(6)×5 5個の環状6番染色体
シンボル"×"は数的異常には用いない。
- (16) 派生染色体の新しい定義
2個以上の染色体が関与し生じる構造異常, もしくは1個の染色体内で生じる1つ以上の構造異常
- (17) 複数の転座 (右が改訂後、右下段が対応する detailed system)
例 : der(1)t(1;3)(p32;q21)t(3;7)(q28;q11) der(1)t(1;3;3;7)(p32;q21;q28;q11)
7qter→7q11::3q28→3q21::1p32→cen→1qter
- (18) ロバートソン型転座 (右が改訂後)
例 : 45,XX,t(13;14)(p11;q11) 45,XX,t(13;14)(p10;q10)
- (19) 不確かな切断点にシンボル"~"を使用
例 : 46,XX,del(1)(q21~24)
- (20) In situ ハイブリダイゼーション用の表記法
(A) シンボル
+ present on a specific chromosome
- absent on a specific chromosome
++ duplication on a specific chromosome
× multiplication, preceding the number of signals seen
dim diminished signal
enh enhanced signal
amp amplified signal
mv moved signal
st stationary signal
sp split signal
con connected signal
sep separated signal
wcp whole chromosome paint
pcp partial chromosome paint
ish metaphase chromosome in situ hybridization
nuc ish nuclear or interphase in situ hybridization
fib ish extended chromatin DNA fiber in situ hybridization
rev ish reverse in situ hybridization including comparative genome in situ hybridization

(B) 表記例：最初に karyotype, 次にピリオド, 次に ish の種類, 次に ish で同定した異常の karyotype, 次にそれを同定したプローブの座位(GDB登録の locus 名か遺伝子名)

例 46,XY.ish del(22)(q11.2q11.2)(D22S75-)
 46,XX,del(15)(q11q13).ish del(15)(SNRPN-,D15S10-)
 46,XY.ish del(15)(q11.2q11.2)(SNRPN-, D15S10-)
 46,XY.ish del(15)(q11.2q11.2)(D15S11+,SNRPN-,D15S10-,GABRB3+)
 46,XX.ish 22q11.2(D22S75 × 2)
 46,XY.ish dup(17)(p11.2p11.2)(D17S122++)
 46,XY.ish 17p11.2(D17S122 × 2)
 46,XX,add(4)(q33).ish dup(4)(q33q35)(wcp4+)
 46,X,r(X).ish r(X)(p22.3q21)(KAL+,DXZ1+,XIST+,DXZ4-)
 46,X,+r.ish r(X)(wcpX+,DXZ1+)
 46,X,idic(Y)(q11.2q11.2).ish idic(Y)(DYZ23++,DYZ1-)
 45,XY,rob(14;21)(q10;q10).ish dic(14;21)(p11.2p11.2)(D13Z1/D21Z1+,
 D14Z1/D22Z1+)
 46,XY,inv(17)(p13q21).ish inv(17)(p13.1q21.3)(D17S379 st,RARA mv)
 46,XY.ish inv(16)(p13q22)(pcp16p sp)
 46,XX.ish t(4;11)(p16.3;p15.3)(wcp 11+,D4F26-,D4S96+,D4Z1+;D4F26+,wcp 11+)
 46,XY.ish 4(D4F26 × 2, D4S96 × 2)
 46,XX,dir ins(2)(p13q21q31).ish 2(wcp 2+)
 46,XY,inv ins(5;2)(p14;q22q32).ish inv ins(2)(wcp 2+)
 47,XY,t(9;22)(q34;q11.1),+der(22)t(9;22).ish t(9;22)(ABL1-;BCR+,ABL1+),der(22)
 (BCR+,ABL1+)
 46,XY,t(9;22)(q34;q11.1).ish t(9;22)(ABL-;BCR+,ABL+)
 47,XY,+mar.ish der(8)(cen)(D8Z1+)
 47,XY,+mar.ish der(17)(wcp 17+)
 47,XY,+mar.ish der(17)t(17;19)(wcp 17+;wcp 19+)
 47,XX,+mar.ish add(17)t(17)(17;?)(p11.2;?)(wcp 17+;wcp 17+,D17S122+,D17Z1+)
 47,XY,+mar.ish add(16)t(16;?)(wcp 16+;-)
 46,XX.ish del(7)(q11.23q11.23)(ELN-)
 nuc ish 21q22(D21S65 × 2)
 nuc ish 21q22(D21S65 × 2,D21S64 × 3)
 nuc ish 21q22(D21S65 × 2),21q22.3->ter(D21S1219 × 2)
 nuc ish Xp22.3(KAL × 2),21q22(D21S65 × 3)
 nuc ish 9q34(ABL1 × 2),22q11(BCR × 2)
 nuc ish 9q34(ABL1 × 2),22q11(BCR × 2)(ABL1 con BCR × 1)
 nuc ish 9q34(ABL1 × 3),22q11(BCR × 3)(ABL1 con BCR × 2)
 nuc ish Xp22.3(KAL × 2,STS × 2)(KAL con STS × 2)
 nuc ish Xp22.3(KAL × 2,STS × 2)(KAL sep STS × 1)
 fib ish del(15)(q11.2q11.2)(D15S11+,SNRPN-,GABRB3+)
 fib ish dup(15)(q11.2q11.2)(D15S11++,SNRPN+,GABRB3+)
 fib ish inv(15)(q11.2q11.2)(D15S11 sp,GABRB3 mv,SNRPN mv,D15S11 sp)

fib ish inv(15)(q11.2q11.2)(D15S11 sp con GABRB3 sp,SNRPN+,D15S11 sp con GABRB3 sp)

47,XX,+mar.rev ish enh 10p

46,XX,add(7)(q36).rev ish der(7)t(7;21)(q36;q22)enh21q22

rev ish enh21

rev ish dim 18q21->qter

rev ish enh(7,19p),dim(10),amp(1q31->q32,7p12,7q21)

rev ish XX

rev ish XY

rev ish X

rev ish enh X

47,XX,+mar.rev ish 15q

46,XY,add(5)(p16).rev ish der(5)t(5;10)(p16;q22)

日本学術会議だより №.35

第16期活動計画決まる

平成6年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、9月28日から30日までの3日間、第120回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、総会の概要及び第16期活動計画についてお知らせします。

日本学術会議第120回総会報告

日本学術会議第120回総会は、平成6年9月28日から3日間にわたって開催されました。

この中で、①第16期の活動の指針となる「第16期活動計画(申合せ)」を賛成多数で可決しました。その他②第2部世話担当の「環境法学・環境政策学研究連絡委員会」の設置及び第3部世話担当の「技術革新問題研究連絡委員会」を「技術革新・技術移転問題研究連絡委員会」に名称変更することを内容とした日本学術会議会則の改正、③運営審議会附置将来計画委員会を改組して、移転準備委員会を設置することをいずれも賛成多数で可決しました。
なお、活動計画の内容は、下記のとおりです。

第16期活動計画(申合せ)

今世紀後半、世界は大きく変化し、今や重大な転換期を迎えるに至った。人類は、多くの新たな問題に直面し、21世紀に向けてその生存と繁栄のための新たな世界秩序を模索している。ここにおいて人類の「知」の適切な行使が求められ、学術に対する期待が高まるとともに、学術自体のあり方もまた問いなおされようとしている。このような世界情勢の中で、我が国の諸活動における学術の重要性はますます増大しており、我が国の将来は一に学術の発展にかかっているといても過言ではない。

本会議は、科学が文化国家の基礎であるという確信に立って、科学者の総意の下に、我が国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与することを使命として設立された(日本学術会議法前文)。その後半世紀にわたり、本会議は我が国の科学者の内外に対する代表機関として、学術の進展に貢献してきたが、上記の学術の重要性にかんがみ、本会議の果たすべき役割は、さらに増大しつつある。

本会議は、その役割を遂行するために、以下のとおり第16期における活動計画を定め、人文・社会科学及び自然科学を網羅する我が国唯一の機関であるという特色を生かしつつ、これに即して活動する。

1. 活動の視点

日本学術会議は、第16期の活動において、以下の視点を重視する。

(1) 歴史的転換期における新たな展望の探求

人類の歴史は、今や重大な転換期を迎え、その先行きはきわめて不透明である。人類社会は、21世紀に向けてその未来を切り開くために、学術の発展をますます必要とし、学術の主体性を確立することを求めている。日本学術会議は、学術と社会との深い関わりに思いをいたし、人文・社会科学及び自然科学にわたる我が国の科学者の

総意を結集し、人類社会の新たな展望の探求のために、学術が果たすべき役割を考察する。

(2) 日本の学術研究体制の方向づけ

学術が果たすべき役割からみたと、日本の学術研究体制の現状には、早急に改善すべき点が多々存在する。特に、その中軸をなす大学、研究機関、学術団体は、研究の進歩に伴う新たな専門分化や、急速に進行しつつある学術の国際化、情報化に早急に対応することを迫られている。また、これらは、研究上の後継者を含む人材育成における深刻な困難に直面し、その克服の方法を模索している。日本学術会議は、日本の学術研究体制が新たな状況に対応し、人類社会の期待に応える研究成果を生み出すことができるように、その方向づけについて協力する。

(3) 国際学術活動への積極的貢献

我が国における学術の国際交流は、従来ややもすると先進諸国の学術を受容することに重点が置かれてきた。しかし、今や我が国には、国際平和の推進や環境問題の解決等、地球的、国際的規模の課題について、自らの研究を充実させつつ、広く世界の学術の発展に積極的に寄与することが求められている。

このため、日本学術会議は、日本の学術が受け身の態勢を脱し、その特色を生かしつつ、世界の学術の発展のためにイニシアティブを発揮することができるように、自らの役割を果たすべきである。

2. 重点課題

日本学術会議が対応すべき学術上の課題としては、(1)各学術分野に共通する学術研究体制上の当面の重要課題、(2)現在、人類社会が直面している重要課題で、人文・社会科学から自然科学にわたる総合的な知見が必要とされているもの、(3)今後重要となってくると予想される学術的な重要課題のうち、本会議として特に先見性を発揮して研究環境の整備等を訴えるべきもの、が考えられる。

本会議は、これらの中から早急に取り組むべき重点課題を設定し、人文・社会科学から自然科学にわたる全分野の科学者の意見を結集して検討にあたる。

これらのうち、特に緊急な対応を要する課題は、機動的かつ早急に審議を行い、その結果を対外的に発表する。さらに、第16期中に発生するであろう新たな問題についても、遅滞なく対応する。

日本学術会議は、発足して50年近くになるが、本会議そのもののあり方についても常に検討を続ける必要がある。現時点において取り組むべき重点課題を以下に示す。

(1) 21世紀に向けての新しい学術の動向

「知」の総合化や学術諸分野の再編成など、新しい学術の動向を、とりわけパラダイムの転換を中心に把握し、21世紀に向けての学術のあり方について検討する。

(2) 学術研究体制の整備

① 学術団体の支援・強化の方策

さまざまな困難に直面している学術団体の現状を踏まえ、その支援・強化等の方策について検討する。

② 大学・研究機関における研究基盤の改革

大学院重点化やセンター・オブ・エクセレンスの構想等我国の研究体制の新しい動向を把握し、大学・研究機関における研究基盤の改革について検討する。

③ 優れた研究者の養成・確保と教育

若者が理工系を始めとして長期の学習を要する学術分野を離れる傾向が指摘されていることから、優れた研究者の養成・確保の方策について、教育のあり方をも含めて検討する。

(3) 科学者の地位と社会的責任

女性科学者の研究環境の改善について声明を發した第15期に引き続き、学問・思想の自由、科学者の地位と倫理・社会的責任について検討を深める。特に、我が国の若手研究者の研究環境を改善し、研究意欲を向上させるために、科学者の地位・処遇、研究費の配分、業績評価のあり方等について検討する。

(4) 学術情報・資料の充実・整備

① 学術における情報化の推進

今後極めて重要となるデータベースの作成やコンピュータ・ネットワーク・システムの整備など、学術における情報化の推進方策について検討する。

② 公的資料等の保存・施設整備と公開

公的資料等の保存、その施設・設備の整備と公開手続の確立についてさらに前進させる。

③ 知的財産権

急速な情報技術の進展に伴い、顕在化してきた知的財産権の問題について、専門家の養成の問題をも含めて検討する。

(5) 国際学術交流・協力の推進

① 学術における国際化の推進と国際対応力の強化

学術分野における国際化の推進と国際対応力の強化方策について、いわゆるメガサイエンスにおける国際協力のあり方をも含めて検討する。

② 国際的にバランスのとれた学術交流・協力のあり方

欧米諸国との交流に偏っている現状を見直し、バランスのとれた学術交流・協力を実現するために、アジアを始めとする世界の諸地域との学術交流・協力のあり方や交流・協力のための基盤の育成方策について検討する。

③ 学術国際貢献のための新システム

学術分野における国際貢献のために必要とされ、第15期において検討された新たなシステムの構築について、さらに努力する。

(6) 高齢化社会の多面的検討

高齢化の急速な進行に直面しつつも、健やかに老いることのできる社会の実現のため、生き甲斐の問題や小児期からのライフスタイルの改善、雇用・年金・医療・福祉など高齢化社会に伴う経済上、法律上の諸問題、高齢化社会に向けての研究開発体制、高齢化社会に適合する医療とケアのシステムなどについて、老人医学を始めとする諸科学が協力して多面的に検討する。

(7) 生命科学の進展と社会的合意の形成

生命科学とその応用の急速な進展のもたらす倫理的、社会的諸問題について、自然科学と人文・社会科学との協力の下に検討し、これら諸問題の解決方策の検討及びこれに対する社会的合意の形成に資する。

(8) 学術と産業

学術と産業の関わりの実態分析の上に立ち、今日の学術と産業とがそれぞれにとって有する意義と問題点とを明らかにするとともに、企業と大学・研究機関における適切な研究の役割分担や基礎的研究の研究体制など、学

術と産業との関係のあり方を行政の位置づけをも含めて検討する。

(9) 地球環境と人間活動

人類の経済社会活動の拡大に伴い深刻化している環境問題について、エネルギーや土地の利用などの人間活動との関連や、ライフスタイルのあり方、人口と食糧の問題の検討を含め、持続可能な発展のための方策、及びこれに対する我が国の貢献のあり方について検討する。

(10) 脳の科学とこころの問題

今後の学術研究において重要な学際的課題となることが予想される脳の科学とこころの問題について、21世紀に向けての学術研究上の課題と展望とを明らかにするとともに、今後の研究体制のあり方について検討する。

(11) アジア・太平洋地域における平和と共生

国際的な平和の問題が新たな様相を呈している冷戦後の世界情勢を検討する中で、特にアジア・太平洋地域における平和と安全に関連する諸要因を分析し、貧困の克服と福祉の増進、経済発展と科学技術、文化の相互関係と多様な価値の共存の問題など、平和と共生に寄与するための学術的視点について、アジア・太平洋地域に重点を置いて検討する。

(12) グローバリゼーションと社会構造の変化

世界が、国際化・情報化・市場経済化などを通じてグローバル化に向かって大きく変化している中で、我が国の産業空洞化、日本型経営・雇用慣行の変質、多国籍企業や知的財産権の問題、市民生活・文化へのインパクトなど社会構造に生じている新しい課題を洞察し、これに抜本的に対処するため、学術的視点から検討する。

3. 重点課題の審議

上記の重点課題の審議は、常置委員会及び今期の当初設置する特別委員会(別表2)がこれにあたる。両委員会は、速やかに審議を行い、第16期中(緊急性のあるものについては、1年ないし2年以内)に検討結果を発表する。常置委員会、特別委員会及び研究連絡委員会は、相互の連絡・協力を密にする。

なお、常置委員会及び特別委員会の所掌事項は別表1及び2に示すとおりである。(別表1及び別表2省略)

※参考

〈常置委員会名〉 (事 項)

第1常置一研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織に関すること。

第2常置一学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

第3常置一学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

第4常置一創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

第5常置一学術情報・資料に関すること。

第6常置一国際学術交流・協力に関すること(第7常置委員会の事項に属するものを除く)。

第7常置一学術に関する国際団体への対応及びその団体が行う国際学術協力事業・計画への対応に関すること。

〈特別委員会名〉

高齢化社会の多面的検討

生命科学の進展と社会的合意の形成

学術と産業

研究者の養成・確保と教育

地球環境と人間活動

脳の科学とこころの問題

アジア・太平洋地域における平和と共生

グローバル化と社会構造の変化

(注) 特別委の検討事項は「2重点課題」の関係項に同じ。

日本医学会だより

JAMS News

1994年10月 No.12

日本医学会
〒113 東京都文京区本駒込2-28-16
日本医師会館内 TEL 03-3946-2121

第100回日本医学会シンポジウム

1994年8月26日～28日に「新薬と評価」をテーマに、パレスホテル箱根で開催された。

本シンポジウムに関しては、野々村禎昭、上田慶二、佐々木弥生の3氏によるシンポジウム組織委員でプログラムの編成が行われた。

プログラムは、I. 新薬の評価—基礎的側面—、II. 臨床試験のあり方、III. 国際協調よりみた新薬評価、の3セッションから構成され、時宜を得たテーマとして、活発な議論が展開された（参加者総数45名）。

第101回日本医学会シンポジウム

「シナプスの可塑性と高次脳機能」が、1994年12月15日（木、10:00～17:15）に日本医師会館大講堂で開催される。

本シンポジウムの組織委員は、津本忠治、黒田洋一郎、酒田英夫の3氏からなる。参加希望者は、日本医学会に葉書で申し込まれたい。参加費は無料。

プログラムの概要は、下記のとおりである。

I. 脳の発達とシナプス可塑性

1. 大脳皮質層形成の分子機構/小川正晴（高知医大・生理学） 2. 視覚野の層構造の形成機序/外山敬介（京都府立医大・生理学） 3. 大脳皮質コラムと可塑性シナプス/津本忠治（阪大バイオメディカル教育研究センター・高次神経医学）

II. 記憶・学習とシナプスの可塑性

4. 海馬シナプスの長期増強およびその消去のメカニズム/加藤宏司（山形大・生理学） 5. 小脳長期抑圧の生理学的意義とその分子メカニズム/渋谷克栄（新潟大脳研・神経生理学） 6. ニューロン回路網の可塑性とシナプスの形態変化/黒田洋一郎（都神経科学総合研・神経生化学）

III. 高次脳機能の最近の進歩

7. 大脳連合野における視覚認知の機能分化/酒田英夫（日大・生理学） 8. 視覚連合野における知覚と記憶の統合メカニズム/酒井邦嘉・宮下保司（東大・生理学） 9. 海馬体における空間記憶のニューロン機構/小野武年（富山医薬大・生理学）

新規加盟学会審査制度検討委員会

1993年度に発足した標記委員会の目的は、分科会の新規加盟審査のあり方を見直すことにある。日本医学会の動向が多方面から注目されている現在の状況を考慮しながら、できるだけ広い視野からの検討を行っている。

医学界と薬業界等との連携に関する検討委員会

第2回標記委員会が、1994年7月25日に開催された。今回は、薬業界からオブザーバーを招き、「医薬品の臨床試験の依頼に係わる研究費等の取扱いに関する綱領」の説明を伺い、それをもとに種々意見を交換した。

認定医制についての三者懇談会

1994年7月29日に、第17回認定医制についての三者懇談会が開催された。長年にわたって検討されてきた「認定医公認」がようやく実現することになり、承認対象の13学会の認定医を学会認定医制協議会議長、日本医学会長、日本医師会長の三者連名のもとに1994年4月1日付で承認することになった。これに従い、9月以降に学会認定医制協議会事務局から「承認通知書」、「承認通知書送付に当たっての添書」、「承認シール」が13学会に送付され、有資格者に配付される手順となる。

承認対象の13学会は、次のとおりである。内科、小児科、皮膚科、外科、整形外科、産科婦人科、耳鼻咽喉科、眼科、泌尿器科、麻酔、医学放射線、病理、臨床病理。なお、精神神経学会は学会認定医制協議会という基本的領域診療科に含まれているが、認定医制度を実施していないので当面は対象にならない。

医学賞・医学研究助成費授賞の決定

医学賞・医学研究助成費選考委員会は、日本医師会から本会に委託されており、本年度は9月12日に開催された。授賞は、日本医師会設立記念医学大会(11月1日)において行われる。

日本医師会医学賞は、22件から下記の3名を選考し、日本医師会に推薦した(敬称略)。

基礎部門: 北村幸彦(大阪大・病理学)「マスト細胞の分化・生存・癌化の制御機構」

臨床部門: 井形昭弘(国立療養所中部病院・内科学)「難治性神経疾患の解明—SMONからHAMへ—」、宇都宮讓二(兵庫医大・外科学)「機能温存的大腸全摘術の研究—J型回腸囊肛門吻合術の確立—」

また日本医師会医学研究助成費は、86件中、次の16件を選考した。

基礎部門: 「筋細胞における機能的収縮構造構

築の機構とダイナミクスに関する分子細胞生物学的研究」嶋田 裕(千葉大・解剖学)、「遺伝子標的組込みによる疾患モデルマウス作製系の確立」島田和典(大阪大微生物病研・生化学)、「抗不整脈薬の有効性を判定する動物モデル不整脈の開発」橋本敬太郎(山梨医大・薬理学)、「癌免疫における癌拒絶抗原としての熱ショック蛋白質の研究」佐藤昇志(札幌医大・腫瘍免疫学)、「虚血性心疾患の発生・進展におけるサイトカインの役割に関する基礎的・臨床的研究」下川宏明(九大・内科学)

社会部門: 「久山町の地域住民における老年期痴呆の有病率および発症率の疫学調査」藤島正敏(九大・内科学)

臨床部門: 「イオンチャネルの制御による血管平滑筋細胞の増殖コントロール法の確立」小島至(群馬大・内科学)、「アルツハイマー病脳におけるβ蛋白分子種のELISAおよびマスマスペクトロメトリーによる検討」玉岡 晃(筑波大・内科学)、「アルツハイマー病におけるイノシトールリン脂質代謝異常の分子生物学的研究」下濱 俊(京都市大・内科学)、「癌の放射線治療効果と種々の癌関連遺伝子発現に関する免疫組織化学的検討」小川恭弘(高知医大・内科学)、「眼皮膚白皮症の原因となるチロジナーゼ遺伝子の変異についての研究」富田 靖(秋田大・皮膚科学)、「ヒト生理活性物質のみから構成される新しい治療薬の開発」上田政和(慶應大・外科学)、「パーキンソン病に対する星状神経節移植術が認知機能に及ぼす影響について」前島伸一郎(和歌山医大・リハビリテーション医学)、「加齢による性機能低下の実態及びその中枢性要因に関する検討」佐藤嘉一(札幌医大・泌尿器科学)、「脊髄におけるプロスタグランジンの痛覚に及ぼす影響」南 敏明(大阪医大・麻酔学)、「細胞傷害性遺伝子を用いた上皮性卵巣癌に対する遺伝子治療の基礎的臨床的検討」田中憲一(新潟大・産科婦人科学)。